



平成28年3月期 決算短信〔日本基準〕(非連結)

平成28年5月12日
上場取引所 東

上場会社名 株式会社テクノマセマティカル
コード番号 3787 URL <http://www.tmath.co.jp/>

代表者 (役職名) 代表取締役社長

(氏名) 田中 正文

問合せ先責任者 (役職名) 取締役副社長

(氏名) 出口 真規子

TEL 03-3492-3633

定時株主総会開催予定日 平成28年6月23日

有価証券報告書提出予定日 平成28年6月23日

配当支払開始予定日 —

決算補足説明資料作成の有無 : 有

決算説明会開催の有無 : 有 (機関投資家・アナリスト向け)

(百万円未満切捨て)

1. 平成28年3月期の業績(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

(1) 経営成績

(%表示は対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
28年3月期	691	15.1	△55	—	△55	—	△58	—
27年3月期	600	10.0	△139	—	△127	—	△143	—

	1株当たり当期純利益	潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	自己資本当期純利益 率	総資産経常利益率	売上高営業利益率
	円 銭	円 銭	%	%	%
28年3月期	△22.59	—	△2.1	△1.9	△8.0
27年3月期	△55.24	—	△4.9	△4.2	△23.1

(参考) 持分法投資損益 28年3月期 ー百万円 27年3月期 ー百万円

(2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
28年3月期	2,927	2,822	96.4	1,088.47
27年3月期	2,967	2,875	96.9	1,108.81

(参考) 自己資本 28年3月期 2,822百万円 27年3月期 2,875百万円

(3) キャッシュ・フローの状況

	営業活動によるキャッシュ・フロー	投資活動によるキャッシュ・フロー	財務活動によるキャッシュ・フロー	現金及び現金同等物期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
28年3月期	30	△552	—	420
27年3月期	△266	△14	1	942

2. 配当の状況

	年間配当金					配当金総額 (合計)	配当性向	純資産配当 率
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計			
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	百万円	%	%
27年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00	0	—	0.0
28年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00	0	—	0.0
29年3月期(予想)	—	0.00	—	0.00	0.00	—	—	—

3. 平成29年3月期の業績予想(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり当期 純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	330	25.3	△92	—	△92	—	△94	—	△36.25
通期	860	24.4	50	—	50	—	58	—	22.37

※ 注記事項

(1) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無
- ② ①以外の会計方針の変更 : 無
- ③ 会計上の見積りの変更 : 無
- ④ 修正再表示 : 無

(2) 発行済株式数(普通株式)

- ① 期末発行済株式数(自己株式を含む)
- ② 期末自己株式数
- ③ 期中平均株式数

28年3月期	2,593,100 株	27年3月期	2,593,100 株
28年3月期	— 株	27年3月期	— 株
28年3月期	2,593,100 株	27年3月期	2,592,672 株

※ 監査手続の実施状況に関する表示

この決算短信は、金融商品取引法に基づく監査手続の対象外であり、この決算短信の開示時点において、財務諸表に対する監査手続が実施中です。

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

(将来に関する記述等についてのご注意)

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料P. 2「1. 経営成績・財政状態に関する分析(1) 経営成績に関する分析」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 経営成績・財政状態に関する分析	2
(1) 経営成績に関する分析	2
(2) 財政状態に関する分析	3
(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当	4
(4) 事業等のリスク	4
(5) 継続企業の前提に関する重要事象等	6
2. 企業集団の状況	7
3. 経営方針	8
(1) 会社の経営の基本方針	8
(2) 目標とする経営指標	8
(3) 中長期的な会社の経営戦略	8
(4) 会社の対処すべき課題	8
4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方	9
5. 財務諸表	10
(1) 貸借対照表	10
(2) 損益計算書	12
(3) 株主資本等変動計算書	13
(4) キャッシュ・フロー計算書	14
(5) 財務諸表に関する注記事項	15
(継続企業の前提に関する注記)	15
(重要な会計方針)	15
(表示方法の変更)	15
(損益計算書関係)	16
(株主資本等変動計算書関係)	17
(キャッシュ・フロー計算書関係)	17
(リース取引関係)	17
(金融商品関係)	18
(有価証券関係)	19
(デリバティブ取引関係)	20
(退職給付関係)	20
(ストック・オプション等関係)	20
(税効果会計関係)	20
(持分法損益等)	20
(企業結合等関係)	21
(資産除去債務関係)	21
(賃貸等不動産関係)	21
(セグメント情報等)	21
(関連当事者情報)	21
(1株当たり情報)	22
(重要な後発事象)	22

1. 経営成績・財政状態に関する分析

(1) 経営成績に関する分析

当事業年度（平成27年4月1日～平成28年3月31日）における我が国経済は、雇用情勢の改善はあるものの実質賃金の上昇が非常に緩やかなこと等から個人消費に力強さはない一方、輸出企業を中心に企業業績は改善を続ける等、総じて回復傾向を維持しました。一方、目を海外に転じると、米国はゼロ金利を解除するなど回復傾向を持続させていますが、欧州経済は緩やかな回復に止まる上、中国をはじめ新興国の景気は減速感が強まるなど、先行き不安を残して推移しました。

このような中、当社の主要顧客業界である電子機器関連業界は、事業の再編を進めつつも、新興国向けに機能・性能を絞った製品の開発を進める一方、競争力の源泉である優れたアルゴリズムを用いた映像・画像・音声の圧縮伸張技術を追求し続けております。

具体的には、携帯型端末においてはワンセグ機能に加え、より高画質、大画面の方向に向かっていくことから、映像・画像の圧縮伸張コア技術であるビデオコーデックにおける優れたアルゴリズムを市場が求めております。また、デジタル情報家電においても、高画質化に加え高音質化が求められており、低消費電力と合わせてそれらを実現するオーディオコーデックが期待されてきております。さらに、動画像の配信・伝送分野においても、低ビット・レートでも高画質、高音質、低遅延を実現する圧縮伸張技術が必要不可欠のものとなっております。

このような状況下、DMNAアルゴリズムを用いて高画質、高音質、低遅延はもちろん、地球環境にやさしい省エネルギーなグリーン製品群を提供している当社は、国際標準規格に基づく圧縮伸張ソリューションの機能強化ならびに受注活動を行うとともに、独自規格のオリジナル・コーデックや圧縮してもデータが劣化しないロスレス技術、さらには各種ソリューション製品などをさらに市場投入すべく営業努力を重ねてまいりました。

この結果、前期に続きH.265/HEVCリアルタイムデコーダ・ソフトウェアを組み込んだ配信システムが放送機器向けに採用されたほか、オリジナル・コーデックを使用したソリューション製品である低遅延小型版伝送装置が官公庁入札案件用に採用され、落札するなどの成果を上げました。

一方、費用・損益面では、売上高は前期を上回ったものの、販管費などのコストを賄うには至らず、損失計上を継続することとなりました。

なお、当社の売上高は、主要顧客の決算期末（主として9月と3月）に集中する傾向がある一方、販管費等のコストは、各四半期とも大幅な変動はない、という特徴を有しております。

以上の結果、当事業年度の売上高は691百万円（前期比15.1%増）となり、経常損失55百万円（前期は経常損失127百万円）、当期純損失58百万円（前期は当期純損失143百万円）となりました。

部門別の業績につきましては、次のとおりです。

（ソフトウェアライセンス事業）

営業活動におきましては、単体IPでのライセンス営業から複数IPをモジュール化したのライセンス営業に力をいれました。

主要な案件としましては、次のとおりです。

《量産ライセンス》

- ・ハンズフリー：車載向け
- ・ワンセグプレーヤー：車載向け
- ・LossLess Viewer用ソフトウェア・デコーダ：デジタルカメラ向け
- ・トランスコーダ：接続機器向け

《評価ライセンス》

- ・H.265/HEVC 8K デコーダ：放送機器向け
- ・AAC-LCエンコーダ：デジタルカメラ向け
- ・トランスコーダ：接続機器向け
- ・ノイズサプレッサ：テレビ会議システム向け
- ・H.264BPデコーダ：小型表示機用ボード向け
- ・H.264BPデコーダ：警備システム向け
- ・AAC-LCデコーダ：デジタルカメラ向け
- ・JPEGデコーダ/HEAAC ver2デコーダ：放送機器向け
- ・H.265/HEVC デコーダ：携帯端末向け
- ・ノイズサプレッサ：携帯端末向け（音声認識前処理）
- ・低遅延伝送コーデック：車載機器向け

以上の結果、当事業年度の売上高は239百万円となりました。

（ハードウェアライセンス事業）

営業活動におきましては、4K技術、ロスレス技術、H.265を中心にライセンス営業活動、海外案件獲得活動を展開しました。

主要な案件としましては、次のとおりです。

《量産ライセンス》

- ・H.264HP コーデック/4K：デジタルカメラ向け

《評価ライセンス》

- ・ニア・ロスレス技術（1/3固定長圧縮）：プロジェクト向け

また、保守契約を2件獲得しています。

以上の結果、当事業年度の売上高は208百万円となりました。

(ソリューション事業)

営業活動におきましては、H.264LSIおよびCPUを搭載して使い勝手をよくした準汎用ボード化製品(TM5184MJC)およびオリジナル・コーデックを用いて低遅延・高画質を両立させた小型版画像伝送システムや放送局向け低遅延送り返しシステムの販売活動、さらには各種ソリューション案件の獲得活動を中心に展開しました。

主要な案件としましては、次のとおりです。

- ・小型HDD記憶装置向けTM5184システムボード：追加受注
 - ・TM5184MJCを用いたフルHD 100ch伝送装置開発製造：実験装置向け
 - ・固定長圧縮改変業務：スマートフォン向け
 - ・H.264オプション機能開発：デジタルカメラ向け
 - ・H.264向けドライバ開発：デジタルカメラ向け
 - ・小型版低遅延伝送装置：放送局他向け
 - ・プリンタヘッド基板：追加受注
 - ・TM5184MJC：モニタリングシステム向け（試作）
 - ・低遅延動画圧縮伝送システム実験研究：船舶装置向け
 - ・小型版低遅延伝送装置：官公庁入札案件用
 - ・固定長圧縮アルゴリズムの応用検討・検証：8K機器向け
 - ・8K HEVCデコーダシステム/4K HEVC配信システム：放送機器向け
 - ・4K画像伝送装置：産業機器向け・その他受託案件：5件
- 以上の結果、当事業年度の売上高は242百万円となりました。

次期につきましては、我が国経済については、賃金・雇用情勢の改善は続くと思込まれるものの個人消費がどこまで伸びるか、さらには最近の円高傾向が輸出・企業業績動向、物価動向にどこまで影響を与えるか等が読みにくい上、世界経済については、米国の追加利上げ時期とその実体経済への影響、中国および新興国での景気減速傾向、原油価格をはじめとする資源価格の低迷によるデフレ圧力、また、東欧および中東での紛争の継続・激化が懸念される等、不透明感とともに推移するものと思われます。

そのような状況下、当社の主要顧客である電子機器関連業界では、4K/8K技術、ロスレス技術、画像圧縮に関する最新の国際標準規格であるH.265の採用などを中心に引き続き需要の掘り起こしに努めるものと思われるため、各メーカーに対しこれら当社技術の採用を積極的に働き掛けてまいります。また、国内大手半導体メーカーのSOC(System on Chip)ビジネスからの撤退が進む中、電子機器メーカーは新しいSOCメーカーを開拓する方向で動くなど、当社にとりましては、従来のようなIP単独でのビジネスは難しい環境になりつつあります。このような環境変化に対応すべく、市場競争力をもった新規IPの開発およびそれらIPを総合的に活用するソリューション・ビジネスの拡大、高度化を進めるとともに、引き続き海外顧客の開拓にも努めてまいります。

以上により、平成29年3月期の通期業績見通しにつきましては、売上高860百万円（前期比24.4%増）、経常利益50百万円（前期は経常損失55百万円）、当期純利益58百万円（前期は当期純損失58百万円）を見込んでおります。

*見通しに関する留意事項

この資料に記載した見通しに関しましては、現時点で得られた情報に基づき判断した予想であり、潜在的なリスクや不確定要素が含まれております。従いまして実際の業績は、これらに記載した見通しとは異なる可能性があります。潜在的なリスクや不確定要素につきましては、継続的に情報収集と分析を行い、万が一、当社の業績に重大な影響が見込まれ、業績予想を修正する必要がある場合には、速やかに公表いたします。

(2) 財政状態に関する分析

①資産、負債及び純資産の状況

当事業年度の資産につきましては、投資有価証券が756百万円増加した一方で、現金及び預金が722百万円、売掛金が110百万円それぞれ減少したことなどにより、当事業年度末の資産合計は2,927百万円となり、前事業年度末より40百万円減少しました。

負債につきましては、買掛金が7百万円増加したことなどにより、当事業年度末における負債合計は104百万円となり、前事業年度末より12百万円増加しました。

純資産につきましては、当期純損失を58百万円計上したことなどにより、当事業年度末における純資産合計は2,822百万円となり、前事業年度末より52百万円減少しております。

②キャッシュ・フローの状況

当事業年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、投資有価証券の取得による支出が748百万円発生したことなどにより、前事業年度末に比べ522百万円減少し、当事業年度末には420百万円となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果獲得した資金は30百万円（前年同期は266百万円の使用）となりました。これは主に、税引前当期純損失を55百万円計上したものの、売上債権が77百万円減少したことなどによるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は552百万円（前年同期は14百万円の使用）となりました。これは主に、定期預金が199百万円純減した一方で、投資有価証券の取得による支出が748百万円発生したことなどによるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当事業年度において、財務活動による資金の増減はありません（前年同期は1百万円の獲得）。

(参考) キャッシュ・フロー関連指標の推移

	平成24年3月期	平成25年3月期	平成26年3月期	平成27年3月期	平成28年3月期
自己資本比率 (%)	96.1	96.5	96.8	96.9	96.4
時価ベースの自己資本比率 (%)	52.5	183.3	69.4	142.5	104.1
キャッシュ・フロー対有利子負債比率 (%)	—	—	—	—	—
インタレスト・カバレッジ・レシオ (倍)	—	—	—	—	—

自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー／利払い

(注1) 株式時価総額は自己株式を除く発行済株式数をベースに計算しております。

(注2) キャッシュ・フローは、営業キャッシュ・フローを利用しております。

(注3) 有利子負債は貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。

(注4) キャッシュ・フロー対有利子負債比率及びインタレスト・カバレッジ・レシオについては、有利子負債が存在しないため、記載しておりません。

(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当

当社は、設立以来、事業基盤の構築と財務体質の強化のために、事業資金の流出を避け内部留保の充実を図ってまいりました。この方針は当期・次期においても引き続き維持していく所存です。一方、株主への利益還元も重要な経営課題として認識しており、経営成績及びキャッシュ・フローの状況を勘案しつつ、将来的には利益配当も検討する所存であります。

(4) 事業等のリスク

以下において、当社の事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしも事業上のリスクに該当しない事項についても、投資家の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資家に対する情報開示の観点から積極的に開示しております。当社は、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の適切な対応に努める方針であります。本株式に関する投資判断は、以下の記載事項及び本項以外の記載事項を、慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。また、以下の記載は本株式への投資に関連するリスクをすべて網羅するものではありませんので、その点ご注意ください。なお、文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

①ライセンス対象製品市場の動向による経営成績への影響について

当社製品のライセンス先は、主に携帯端末やデジタルスチルカメラなどの電子機器メーカーまたはこれらの電子機器メーカー向けの半導体を製造・販売する半導体メーカーであり、これら顧客の機器製品にソフトウェア、ハードウェアとして組み込まれて使用されております。

携帯端末やデジタルスチルカメラなどの製品は、ライフサイクルが短く、技術革新のスピードも早いため、当社としては日頃から顧客や外部機関からの情報を分析することにより、市場動向の変化、新規製品の開発、新市場の開拓に取り組んでおります。また、大画面対応のセットトップボックスやカーナビゲーションシステムなどの車載情報システム機器の市場にも積極的に取り組んでおり、その成果として、特定市場・製品からのライセンス収入に過度に依存しない、バランスのとれた売上構成に移行しつつあります。しかしながら、これらの最終製品市場の動向に当社の予想以上の変化があった場合には、当社の売上高、利益とも影響を受ける可能性があります。

②特許の出願方針について

当社が開発したDMNA (Digital Media New Algorithm) は、数学を応用し信号処理にかかる演算負荷を軽くする技術であります。従来、数学は特許の対象外とされておりましたが、最近は認められるようになっております。しかしながら、そのほとんどが信号処理の考え方、信号処理の順序、信号処理の変換／置換であり、全てを網羅した特許の一括化は不可能であります。仮に特許を出願した際に公表される明細書から、他社がDMNAの内容を理解し、同社の製品に実装した場合、その抵触性を証明し、当社特許を完全に守ることは難しいと考えております。

このような理由により、当社はDMNAに関する特許は一部の周辺特許を除き出願しておりません。そのため、他社が当該事項に関する特許を取得した場合には、当社の業績に影響を受ける可能性があります。当社では、他社が当該事項に関する特許を出願した場合に備え、学会発表を積極的に行っていく一方、社内または顧客との技術開発、販売条件などの交渉に関する議事録、契約書などすでに事業化していることを立証しうる社内実施記録を残し、「先使用権による通常実施権」を主張することができるように対処しております。

③技術の進展等について

当社の事業は、画像・音声／音響処理技術に密接に関連しておりますが、これらの技術の進展は著しく、また当社の顧客の製品であります携帯端末、デジタルカメラ、ポータブルメディアプレーヤーなどは短期間で新機種が発売され、高機能化も進んでおります。

当社としましても、技術の進展に対応していく方針ではありますが、当社が想定していない新技術の開発、普及により事業環境が急変した場合、必ずしも迅速に対応できないおそれがあります。また、競合他社が当社を上回る技術を開発した場合には、当社技術が陳腐化する可能性があります。

これらの状況に迅速に対応するため、研究開発費などの費用が多額に発生することも可能性として否定できません。このような場合には、当社の経営成績及び今後の事業展開に影響を及ぼす可能性があります。

④ロイヤルティ契約について

当社は、顧客との間において、当社製品を搭載した電子機器または半導体製品などの出荷台数（または出荷個数）に応じて四半期毎にロイヤルティを受領する契約を締結しております。したがって、当社のロイヤルティによる売上高は、顧客の電子機器または半導体製品などの出荷台数（または出荷個数）に影響を受けることとなります。また、顧客の新製品の発売時期が遅延した場合、当初の販売見込を下回った場合、顧客の販売戦略に変更が生じた場合などには、当社の売上高、利益とも影響を受ける可能性があります。

⑤代表者への依存について

当社の代表取締役社長である田中正文は、複雑な演算処理を簡素化する数学的手法を用いた独自のアルゴリズムを研究開発し、この成果を事業化し、当社の経営方針や戦略の決定、技術開発において重要な役割を果たしております。一方で当社は、事業拡大に伴う適切な運営体制・組織への移行ならびに事業基盤の安定化を主たる目的として、田中正文への依存度を低下させるべく、技術者の育成及び権限委譲を進めており、一定の成果をあげつつあります。しかしながら、なんらかの要因により、田中正文の業務執行が困難となった場合には、当社の業績及び今後の事業展開に影響を及ぼす可能性があります。

⑥小規模組織であることについて

当社は、平成12年6月20日に株式会社として設立され、平成17年12月の株式公開を機に人員体制の整備・拡充、少人数の役員への依存状況の改善など、小規模組織に特有な問題の解決に取り組んできていますが、必ずしも十分な水準には至っていないものと認識しております。また、実際のビジネスにおいても、小規模組織であることが顧客の懸念事項となる可能性があることは否定できません。

今後とも、業務遂行体制の整備・充実に努めてまいります。人的資源に限りがあるため、一定数以上の役員が社外流出した場合には、当社の業務に支障をきたす可能性があります。

⑦人材の確保・育成について

当社は、「技術者が報われる」「基幹技術に挑戦する」という基本方針を掲げており、今後の事業拡大には既存のスタッフに加え、優秀な人材の確保、育成が不可欠であると認識しております。

当社としては、人材に報いるための人事・給与制度を導入しておりますが、いずれも継続的な人材の確保を保障するものではなく、適格な人材を十分確保できなかった場合には、当社の事業拡大に制約を受ける可能性があります。当社の業績に影響する可能性があります。

⑧当社の基幹技術の社外流出について

当社の製品を開発するためのDMNAをはじめとした基幹技術は、今後も当社の事業拡大の核になっていくものと認識しております。

当社と従業員及び顧客との間において機密保持契約の締結、IDカードによる入退出管理、コンピューターシステムのセキュリティなど、徹底した情報管理を施しておりますが、今後人材流出や情報漏洩などにより当社の技術が社外に流出した場合、当社の事業運営に影響する可能性があります。

⑨役員の員数について

当社の役員の員数は、現状取締役3名（うち常勤2名）、監査役3名（うち常勤1名）であります。今後、業務の増加に伴い常勤役員を増員する方針であり、また、前期までの株主総会において補欠役員（補欠取締役1名、補欠監査役1名）を選任しておりますが、不測の事態により欠員が生じた場合には、役員選任のため臨時株主総会を開催し、欠員を補充する手続きをとる可能性があります。

⑩販売代理店との関係について

当社は、受注活動の一部を販売代理店に委託しております。これは、きめ細かな顧客フォローや価格などの条件交渉能力などで優れた販売代理店を活用することが有効だと判断しているためであり、今後も販売代理店とのパートナーシップを維持・強化していく方針です。

しかしながら、何らかの理由による販売代理店との契約解消、若しくは販売代理店の経営状態が悪化した場合には、現状の受注活動に影響する可能性があります。

⑪収益構造が下期偏重となることについて

当社の主要顧客である大手電機メーカーは3月決算の会社が多く、顧客の予算編成は、通期または半期単位で行われ、特に国内メーカーでは下期偏重の予算執行となる傾向があります。当社製品を顧客が購入する場合においても、この予算執行のタイミング及び顧客の製品開発サイクルに影響される傾向にあります。このため、当社の売上計画は下期偏重となっております。

四半期開示の一般化により顧客の予算執行が平準化する可能性がある一方、夏商戦・年末商戦を基軸とした大手電機メーカーの製品開発サイクル自体が短期的に大きく変化することは考えづらいため、決算期の異なる海外企業への営業強化やビジネス・ユースのソリューション装置等の製品ラインアップなどにより期中業績の平準化を図っているものの、当面当社の業績は下期偏重とならざるを得ません。今後、取扱い製品を増加させることなどの施策が、期中業績の

平準化に寄与するものと考えております。

⑫業績予想の変動について

当社の収益は、契約時または納品もしくは検品時に売上として計上するイニシャル収入と顧客の使用数量に応じて、一定の期間ごとに集計を行って、売上进行するロイヤルティ収入の二つが主な収入形態となっております。そのため、特にイニシャル収入においては、契約・納品・検品のタイミングに売上計上の時期が大きく左右されます。

また、イニシャル収入の対象となるライセンス契約の金額が比較的高額となることが多く、当該契約締結・納品・検品が当初想定していた会計期間をまたぐ事態（期ズレ）が生じた場合、当該会計期間における当社の売上高、利益ともに大きな影響を受ける可能性があります。

⑬配当政策について

当社は、設立初年度より前事業年度まで利益配当を行っておりません。利益配当は、業容が拡大し財務基盤も安定した後、再投資による利益成長とのバランスなどを総合的に検討・判断して行うべきものとの考えからです。

現在の当社は、配当原資である利益剰余金が累積損失によりマイナスとなっており、配当可能利益は残念ながら有しておりません。

このため、当分の間、累積損失の解消に努めつつ財務基盤の強化、安定に重点を置かざるを得ない状況にあります。

もちろん、株主への利益配分は経営上の重要な検討課題として認識しており、配当政策につきましては、経営体質の強化、将来の事業展開のために必要な内部留保を確保しつつ業績に応じた配当を継続的に行えるようになった段階で、検討してまいりたいと考えております。

なお、内部留保資金につきましては、今後予想される経営環境の変化に対応できる経営体制強化及び技術革新に対応するための研究開発体制強化に有効に投資してまいります。

(5) 継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、平成26年3月期以降当事業年度にいたるまで、3事業年度連続で営業損失を計上しております。このため、継続企業の前提に関する重要事象等が存在している可能性があります。しかしながら、財務面におきましては、当事業年度末での現預金残高は1,820百万円、自己資本比率も96.4%と、いずれも高い水準にあります。また、損益面におきましては、赤字幅が大幅に縮小する等、改善傾向を示しており、平成28年3月期の営業キャッシュ・フローは3事業年度ぶりにプラスとなりました。次の事業年度以降も引き続き新技術の開発と営業活動の強化を推し進め売上高の伸長を図るとともに、不要不急な経費の圧縮等に注力し、損益状況のさらなる改善、黒字化を図ってまいります。従いまして、継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないと判断しており、財務諸表の注記には記載しておりません。

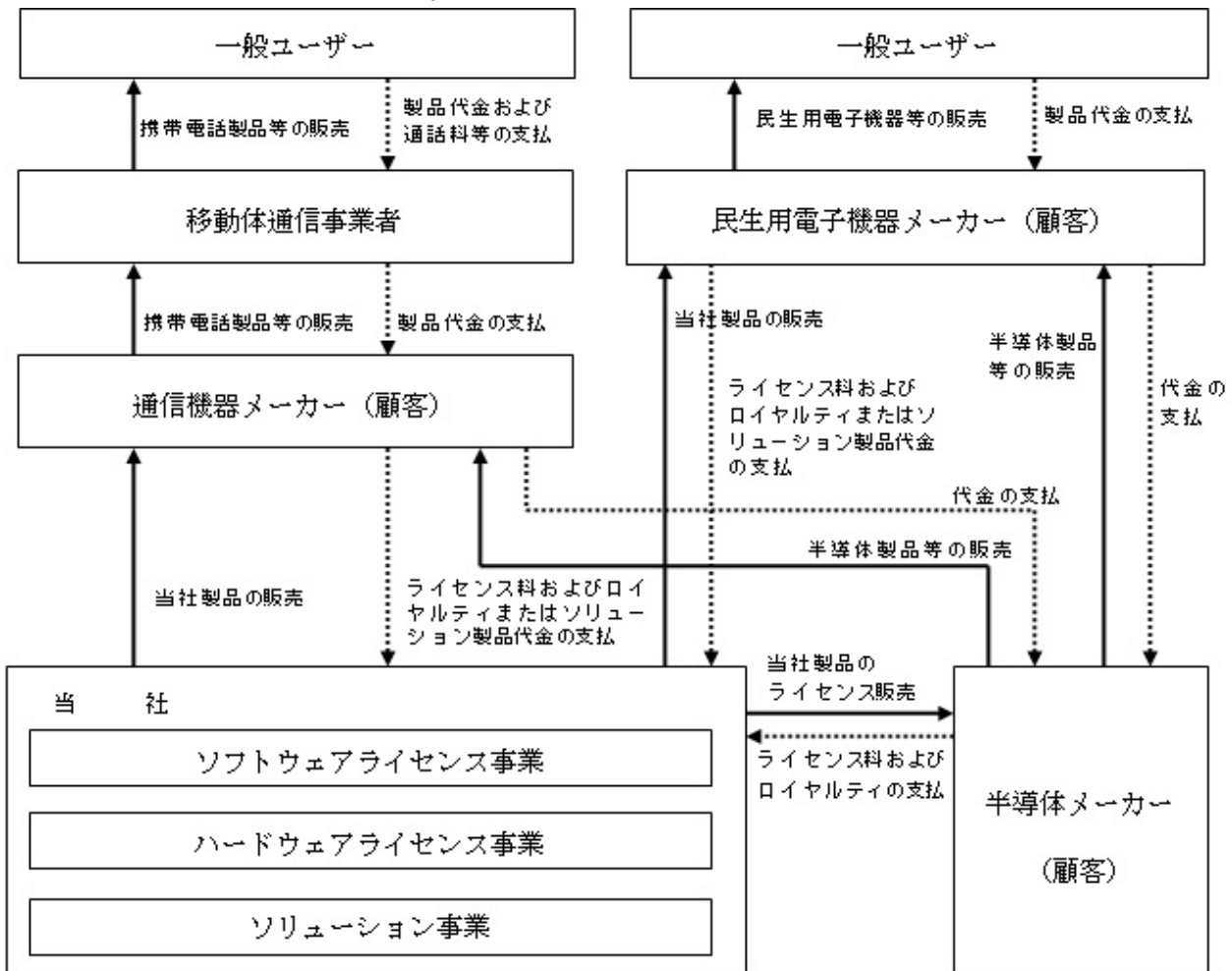
2. 企業集団の状況

当社には、企業集団を構成する関係会社はありません。また、当社との間で密接な事業上の関係のある関連当事者もないため、当社の状況についてご説明いたします。当社は、数学的手法に基づいて独自に開発した革新的アルゴリズムである「DMNA」(Digital Media New Algorithm)を用い、国際標準規格に準拠した画像・音声・音響処理を行なうためのソフトウェア製品、ハードウェア製品、これらの技術をシステムとして総合的に応用したソリューション製品の開発ならびにライセンスおよび販売を主たる事業としております。

現時点における主な事業には、携帯電話やポータブルメディアプレーヤーなどの携帯型端末機器、デジタルスチルカメラやビデオカメラ、監視カメラなどの撮像機器、カーナビゲーションシステムやカーオーディオなどの車載情報システム機器をはじめ、ハイビジョンテレビやアミューズメントマシンなどのセットトップボックスに代表される組込みシステムで動作するソフトウェアを提供するソフトウェアライセンス事業と、これらの電子機器に使われる大規模半導体向けに IP と呼ばれる設計データを提供するハードウェアライセンス事業、および当社の保有するソフトウェア、ハードウェアIPを活用してシステムとして製品化し製造販売するソリューション事業があります。当社はこれらの事業を主として「DMNA」を用いた製品および設計手法に基づいて展開しており、顧客は、一般ユーザーが求める高性能・高画質・高音質・低遅延化と低消費電力化を両立した上で、製造コストを抑えることができるため、競争力のある製品を提供することが可能となります。当社の製品のほとんどは、国際標準規格に完全に準拠し、これまでに蓄積してきた技術を用いて開発されているため、高画質・高音質を実現していますが、さらに当社独自規格に基づき開発した「DMNA-Vシリーズ」の性能は、同分野の他社製品を凌駕しており、採用件数も着実に増えてきております。

〔事業の系統図〕

事業の系統図は次のとおりであります。



3. 経営方針

(1) 会社の経営の基本方針

当社は国際標準規格に準拠した映像／音響などの圧縮・伸張技術を開発および製品化しております。特に数学的手法を駆使して独自に開発したアルゴリズム「DMNA」(Digital Media New Algorithm)を基幹技術として、差別化を図っております。

今後も「Algorithm Specialist」をコンセプトに基幹技術の開発と各種製品への適用を進めてまいります。これらの製品を用いて、様々な電子機器・通信機器向けに高品位な技術とソリューションを提供し、快適で豊かな社会の実現に寄与することを目指してまいります。

(2) 目標とする経営指標

当社の事業は、ソフトウェアライセンス事業、ハードウェアライセンス事業およびソリューション事業の3事業に分かれております。これらの事業をバランスよく拡大させながら売上増加を図り、特に売上総利益率の高いロイヤルティ収入を拡大させることにより、期末に集中する傾向のある売上の平準化および売上高経常利益率の向上を目指してまいります。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社は、組込み機器上のプロセッサで動作するソフトウェアIP製品のライセンス事業と、半導体チップの設計データであるハードウェアIP製品のライセンス事業を軸に事業を進めてまいりました。

国際標準規格に準拠した製品を開発し、世界中の顧客に高品位な技術とソリューションを提供するという基本戦略の下、特にモバイル向け地上デジタル放送(ワンセグ)に必須の映像圧縮・伸張規格であるH.264/MPEG-4 AVCに準拠した製品群の開発および販売に注力してまいりました。また、H.264/MPEG-4 AVC規格に加えて、デジタルハイビジョン放送やIP放送などを視聴する機器に必要な圧縮・伸張規格である、MPEG-2、MPEG-4規格およびWindows Media形式への対応も行っております。さらに、最新の画像圧縮伸張の国際標準規格であるH.265/HEVCを開発し、顧客である電子機器メーカーのFHD(Full High Definition)、4K/8K(FHDの4倍/8倍の精細度)対応を積極的に支援しております。

今後も引き続き、当該製品群のライセンスに注力するとともに、世界各国で順次開始されている地上デジタル放送規格に対応した製品を投入することで、海外市場への本格的な参入を目指してまいります。また、当社の事業形態は「技術のライセンス」を主軸とするため、提供した技術が顧客の最終製品に組み込まれてから量産に移行するまでの期間、ならびにこれに伴って発生するランニングロイヤルティ収入を獲得するまでの期間は相応な長さとなります。これらの期間の収益を補い、将来にわたっての収入を増加させるためにも、新規ライセンス契約の獲得に重点をおいた活動を行ってまいります。

一方、市場においては、用途を限定した、より高性能な独自仕様の圧縮・伸張技術にも注目が集まっており、当社独自規格のエンコーダ／デコーダ「DMNA-Vシリーズ」には、顧客の関心がますます高まっております。また、ソリューション事業においては、ソフトウェアIP、ハードウェアIPとして開発済みの技術・製品を活用して、高画質・高音質・低遅延を実現するシステム製品を開発・製造・販売し、多岐、多様な顧客を獲得する方針で推進してまいります。これにより、当社は顧客のニーズに応じて、ソフトウェア製品、ハードウェア製品、ソリューション製品を柔軟に選択して提供することが可能になり、これらの事業を市場の要求に合わせて的確に展開することで、収益ならびに顧客層の更なる拡大を目指してまいります。

近年は、ソフトウェア製品、ハードウェア製品を総合的に活用・組み合わせたシステム製品・技術の需要が増えてきており、今後もこの傾向は続くものと考えております。このため、現在の保有技術・ノウハウを総合的に活用しつつこれらの市場にも積極的に参入し、IPのライセンス・ビジネスからソリューション・ビジネスへ事業領域を拡大させてきております。なお、この事業領域に必要な技術・ノウハウをすべて自社で開発するにはかなりの時間を要することとなるものと見込まれるため、必要技術・ノウハウなどを補完し合える事業パートナーとの協業も積極的に検討・実施してまいります。

(4) 会社の対処すべき課題

当社は以下の項目を対処すべき課題と捉え、対処してまいります。

① 特定市場への戦略的アプローチ

当社の開発、ライセンスする製品は、国際標準規格に準拠しており、その用途・ライセンス対象は多岐にわたります。一方、デジタル信号処理技術の進展はめざましく、日夜新しい技術・規格が世界中で産み出されており、その競争も非常に激しいものとなっています。このような環境下、より多くの電子機器に当社製品を搭載していただき、ライセンス収入を得るためには、対象となる機器・顧客に最適な性能・機能を持った製品をいち早く開発・提供する必要があります。当社では携帯型機器(Handset)、撮像機器(imaging)、リビング向け機器(Consumer)、アミューズメント(amusement)、車載情報システム機器(Automotive)、および映像・画像配信機器(Broadcasting)を重点対象と位置づけ、これらの市場・顧客に対して、戦略的な受注・開発・ライセンス活動を行なっていく方針です。また、ソリューション製品は主として放送・伝送システムとして市場投入していく方針です。

② 販売体制の拡充

当社の製品は業界の一部では非常に高い評価を得ているものの、業界全体として見た場合には未だ認知度は高くなく、この認知度を上げることが急務であると考えております。より広く潜在顧客へのアプローチを行うことで、当社の潜在市場、製品用途はさらに広がるものと考えております。そのためにマーケティング機能を充実させ、また、営業部門と開発部門とが技術動向のすり合わせを密に行うとともに、代理店との関係を強化することで、より多くの市場へ効率よくアプローチを行ない、国内外を含めた市場拡大を目指していく方針です。

③ 効率的な開発・サポート体制の構築

地上デジタル放送の本格化に伴い、各種表示装置はもちろん、携帯型端末機器へも高精細動画機能が搭載されるなどの環境変化により、当社製品への引合いならびに製品の受注活動が活発化している一方、多様な顧客に対して高品質な製品を提供するための効率的な体制の構築が課題となっております。将来の収益源を産み出す研究・開発組織体制の整備はもちろん、製品化から品質保証・納期対応にいたるまで、一貫した組織体制の構築が事業成長の鍵となると認識し、顧客へのさらなるサポート体制拡充を含めた施策を実施してまいります。

④ デモ・システムの充実

各種デジタル映像・画像機器に当社が開発したDMNA（革新的なアルゴリズム）を用いた圧縮・伸張技術を採用すると、低消費電力化が図れることに加え、画質、音質などの性能が数倍向上します。

このような当社製品の優位性を確認・理解していただけるデモ・システムを開発し、効果的な営業活動が行なえる体制をとってまいります。

⑤ 組織の活性化

当社は社員の平均年齢が約40歳と決して若い企業とは言えません。また、ここ数年の業績動向は決して芳しいものではない一方、業務運営に緊張感、危機意識、活気がない部分が散見されるようになってきました。これらに対処すべく、能力のある若手社員の採用に力を入れるとともに、人事・処遇を今まで以上に成果・貢献度を重視して行うなど、業績回復の前提ともなる組織活性化のための施策を実施してまいります。

4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方

当社は連結財務諸表を作成していないため、国際会計基準に基づく財務諸表を作成するための体制整備の負担等を考慮し、日本基準に基づき財務諸表を作成しております。

5. 財務諸表

(1) 貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,543,016	1,820,824
電子記録債権	—	33,306
売掛金	323,438	212,511
商品及び製品	20,942	18,516
仕掛品	2,313	1,215
原材料及び貯蔵品	139	10,542
前払費用	7,277	8,831
その他	3,109	6,691
流動資産合計	2,900,237	2,112,439
固定資産		
有形固定資産		
建物	12,693	12,693
減価償却累計額	△4,019	△5,313
建物(純額)	8,674	7,379
工具、器具及び備品	192,420	195,590
減価償却累計額	△178,345	△184,952
工具、器具及び備品(純額)	14,074	10,637
有形固定資産合計	22,748	18,017
無形固定資産		
ソフトウェア	410	515
その他	138	138
無形固定資産合計	549	654
投資その他の資産		
投資有価証券	—	756,979
長期前払費用	14,842	9,877
その他	29,608	29,464
投資その他の資産合計	44,450	796,321
固定資産合計	67,748	814,992
資産合計	2,967,986	2,927,432

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	8,175	15,711
未払金	3,603	3,812
未払費用	20,013	20,158
未払法人税等	7,863	9,615
未払消費税等	20,804	18,758
前受金	3,035	3,185
預り金	4,508	4,530
前受収益	648	3,321
賞与引当金	24,082	23,258
流動負債合計	92,736	102,351
固定負債		
繰延税金負債	—	2,577
固定負債合計	—	2,577
負債合計	92,736	104,928
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,032,255	2,032,255
資本剰余金		
資本準備金	2,161,255	2,161,255
資本剰余金合計	2,161,255	2,161,255
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	△1,318,261	△1,376,847
利益剰余金合計	△1,318,261	△1,376,847
株主資本合計	2,875,249	2,816,663
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	—	5,840
評価・換算差額等合計	—	5,840
純資産合計	2,875,249	2,822,503
負債純資産合計	2,967,986	2,927,432

(2) 損益計算書

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
売上高		
製品売上高	595,560	690,676
商品売上高	5,262	841
売上高合計	600,822	691,517
売上原価		
製品期首たな卸高	—	12,956
商品期首たな卸高	9,478	7,986
当期製品製造原価	118,978	92,231
当期商品仕入高	144	14
合計	128,600	113,188
製品他勘定振替高	※1 1,496	※1 870
商品他勘定振替高	※2 1,341	※2 122
製品期末たな卸高	12,956	10,905
商品期末たな卸高	7,986	7,611
商品及び製品売上原価	104,820	93,679
売上総利益	496,001	597,838
販売費及び一般管理費	※3, ※4 635,078	※3, ※4 653,228
営業損失(△)	△139,076	△55,389
営業外収益		
受取利息	1,357	544
有価証券利息	529	421
受取配当金	—	618
為替差益	9,209	—
その他	451	191
営業外収益合計	11,546	1,775
営業外費用		
株式交付費	2	—
支払手数料	—	1,407
為替差損	—	633
営業外費用合計	2	2,041
経常損失(△)	△127,532	△55,655
特別損失		
固定資産廃棄損	※5 4,573	—
和解金	8,180	—
特別損失合計	12,754	—
税引前当期純損失(△)	△140,287	△55,655
法人税、住民税及び事業税	2,931	2,931
法人税等合計	2,931	2,931
当期純損失(△)	△143,218	△58,586

(3) 株主資本等変動計算書

前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位: 千円)

	株主資本					株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計	
当期首残高	2,031,455	2,160,455	2,160,455	△1,175,042	△1,175,042	3,016,867
当期変動額						
新株の発行	800	800	800			1,600
当期純損失 (△)				△143,218	△143,218	△143,218
当期変動額合計	800	800	800	△143,218	△143,218	△141,618
当期末残高	2,032,255	2,161,255	2,161,255	△1,318,261	△1,318,261	2,875,249

当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位: 千円)

	株主資本					株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計	
当期首残高	2,032,255	2,161,255	2,161,255	△1,318,261	△1,318,261	2,875,249
当期変動額						
当期純損失 (△)				△58,586	△58,586	△58,586
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)						
当期変動額合計	—	—	—	△58,586	△58,586	△58,586
当期末残高	2,032,255	2,161,255	2,161,255	△1,376,847	△1,376,847	2,816,663

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計	
当期首残高	—	—	2,875,249
当期変動額			
当期純損失 (△)			△58,586
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	5,840	5,840	5,840
当期変動額合計	5,840	5,840	△52,746
当期末残高	5,840	5,840	2,822,503

(4) キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純損失 (△)	△140,287	△55,655
減価償却費	9,567	8,126
長期前払費用償却額	827	5,472
固定資産廃棄損	4,573	—
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△3,939	△824
受取利息及び受取配当金	△1,886	△1,584
売上債権の増減額 (△は増加)	△120,186	77,620
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△12,841	△6,879
仕入債務の増減額 (△は減少)	3,217	7,535
未払金の増減額 (△は減少)	△5,062	208
未払消費税等の増減額 (△は減少)	13,509	△2,046
その他	△16,095	△578
小計	△268,605	31,394
利息及び配当金の受取額	1,904	2,107
法人税等の支払額	△1,408	△3,245
法人税等の還付額	1,881	291
営業活動によるキャッシュ・フロー	△266,227	30,548
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△1,600,623	△1,400,633
定期預金の払戻による収入	1,600,613	1,600,623
有形固定資産の取得による支出	△22,765	△3,170
有価証券の取得による支出	△500,000	△1,000,000
有価証券の償還による収入	500,000	1,000,000
投資有価証券の取得による支出	—	△748,562
その他	7,796	△750
投資活動によるキャッシュ・フロー	△14,979	△552,493
財務活動によるキャッシュ・フロー		
株式の発行による収入	1,600	—
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,600	—
現金及び現金同等物に係る換算差額	9,569	△257
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△270,037	△522,202
現金及び現金同等物の期首残高	1,212,430	942,393
現金及び現金同等物の期末残高	※ 942,393	※ 420,190

(5) 財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品、製品及び原材料

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は、収益性の低下に基づく薄価切下げの方法により算定）を採用しております。

仕掛品

個別法による原価法（貸借対照表価額は、収益性の低下に基づく薄価切下げの方法により算定）を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

① 有形固定資産

定率法（ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）については定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 8～24年

器具及び備品 2～15年

② 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

③ 長期前払費用

均等償却によっております。

4. 引当金の計上基準

賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込額のうち当期に負担すべき額を計上しております。

5. 収益及び費用の計上基準

受注製作のソフトウェアに係る収益及び原価の計上基準

イ 当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められるプロジェクト

工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

ロ その他のプロジェクト

工事完成基準を適用しております。

6. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(キャッシュ・フロー計算書)

前事業年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めていた「仕入債務の増減額」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度のキャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた12,202千円は、「仕入債務の増減額」3,217千円、「その他」△15,419千円として組み替えております。

前事業年度において、独立掲記しておりました「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「未払費用の増減額」は金額的重要性が乏しくなったため、当事業年度においては「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度のキャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「未払費用の増減額」に表示していた△676千円は、「その他」として組み替えております。

(損益計算書関係)

※1 製品他勘定振替高の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
有形固定資産への振替高	1,496千円	—
販売費及び一般管理費への振替高	—	870千円

※2 商品他勘定振替高の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
製造原価への振替高	1,209千円	122千円
販売費及び一般管理費への振替高	131千円	—

※3 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度1.4%、当事業年度1.1%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度98.6%、当事業年度98.9%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
役員報酬	76,800千円	76,800千円
給与手当	73,440	79,262
賞与引当金繰入額	5,097	4,697
減価償却費	773	702
研究開発費	361,739	374,677

※4 一般管理費及び当期総製造費用に含まれる研究開発費の総額

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
	361,739千円	374,677千円

※5 固定資産廃棄損の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
建物	4,555千円	—
工具、器具及び備品	18	—
計	4,573	—

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数 (株)	当事業年度 増加株式数 (株)	当事業年度 減少株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式 (注)	2,591,100	2,000	—	2,593,100
合計	2,591,100	2,000	—	2,593,100
自己株式				
普通株式	—	—	—	—
合計	—	—	—	—

(注) 普通株式の株式数の増加2,000株は、ストック・オプションの行使による増加であります。

2. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当事業年度(自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数 (株)	当事業年度 増加株式数 (株)	当事業年度 減少株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	2,593,100	—	—	2,593,100
合計	2,593,100	—	—	2,593,100
自己株式				
普通株式	—	—	—	—
合計	—	—	—	—

2. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
現金及び預金勘定	2,543,016千円	1,820,824千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△1,600,623	△1,400,633
現金及び現金同等物	942,393	420,190

(リース取引関係)

前事業年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、資金運用は安全性の高い金融資産を対象に行い、投機的な取引は行わない方針であります。また、資金調達については、運転資金及び少額の設備投資資金に関しては、原則として自己資金で賄う方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である売掛金は、そのほとんどが2か月以内の入金期日となっており、顧客の信用リスクは限定的です。また当該リスクに関しては、当社の販売管理規程に則り、相手先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、信用状況を把握する体制をとっております。

投資有価証券は、余資運用のため保有する株式及び投資信託であり、株式発行体の信用リスク及び市場価格の変動リスクに晒されております。当該リスクに関しては、随時時価や発行体の財務状況を把握し、市況を勘案して保有状況の是非について見直しを行っております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前事業年度（平成27年3月31日）

	貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	2,543,016	2,543,016	—
(2) 売掛金	323,438	323,438	—
資産計	2,866,455	2,866,455	—
(3) 買掛金	8,175	8,175	—
(4) 未払金	3,603	3,603	—
(5) 未払法人税等	7,863	7,863	—
(6) 未払消費税等	20,804	20,804	—
(7) 預り金	4,508	4,508	—
負債計	44,957	44,957	—

当事業年度（平成28年3月31日）

	貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	1,820,824	1,820,824	—
(2) 電子記録債権	33,306	33,306	—
(3) 売掛金	212,511	212,511	—
(4) 投資有価証券	504,747	504,747	—
資産計	2,571,389	2,571,389	—
(5) 買掛金	15,711	15,711	—
(6) 未払金	3,812	3,812	—
(7) 未払法人税等	9,615	9,615	—
(8) 未払消費税等	18,758	18,758	—
(9) 預り金	4,530	4,530	—
負債計	52,427	52,427	—

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 電子記録債権、(3) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 投資有価証券

時価については、取引金融機関等から提示された価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負債

(5) 買掛金、(6) 未払金、(7) 未払法人税等、(8) 未払消費税等、(9) 預り金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。 2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
非上場株式	—	252,232

非上場株式については、市場価格がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるものであるため、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権の決算日後の償還予定額
前事業年度 (平成27年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	2,543,016	—	—	—
売掛金	323,438	—	—	—
合計	2,866,455	—	—	—

当事業年度 (平成28年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	1,820,824	—	—	—
電子記録債権	33,306	—	—	—
売掛金	212,511	—	—	—
合計	2,066,642	—	—	—

(有価証券関係)

前事業年度 (平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度 (平成28年3月31日)

その他有価証券

	種類	貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券			
	① 国債・地方債 等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	449,683	439,239	10,443
	小計	449,683	439,239	10,443
貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券			
	① 国債・地方債 等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	55,063	57,090	△2,026
	小計	55,063	57,090	△2,026
合計		504,747	496,329	8,417

(注) 非上場株式 (貸借対照表計上額252,232千円) については、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(デリバティブ取引関係)

前事業年度(平成27年3月31日)

当社はデリバティブ取引を全く行なっておりませんので、該当事項はありません。

当事業年度(平成28年3月31日)

当社はデリバティブ取引を全く行なっておりませんので、該当事項はありません。

(退職給付関係)

前事業年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

当社は退職給付制度を採用しておりませんので、該当事項はありません。

当事業年度(自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

当社は退職給付制度を採用しておりませんので、該当事項はありません。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
繰延税金資産		
繰越欠損金	441,634千円	437,375千円
賞与引当金	7,971	7,177
商品評価損	8,583	8,127
未払事業税	1,664	2,079
その他	1,546	1,524
繰延税金資産小計	461,400	456,284
評価性引当額	△461,400	△456,284
繰延税金資産合計	—	—
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	—	△2,577
繰延税金負債合計	—	△2,577
繰延税金資産との相殺	—	—
繰延税金負債の純額	—	△2,577

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
税引前当期純損失のため記載を省略しております。	税引前当期純損失のため記載を省略しております。

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成28年法律第15号)及び「地方税法等の一部を改正する法律」(平成28年法律第13号)が平成28年3月29日に国会で成立し、平成28年4月1日以後に開始する事業年度から法人税率等の引下げ等が行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の33.1%から平成28年4月1日に開始する事業年度及び平成29年4月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異については30.9%に、平成30年4月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異については、30.6%となります。この税率変更による影響はありません。

(持分法損益等)

前事業年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

該当事項はありません。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(資産除去債務関係)

1. 資産除去債務のうち貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

事務所用建物の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務であります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を不動産賃貸借契約期間と見積り、これに対応する期間の国債利回りを割引率に使用して資産除去債務の金額を計算しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
期首残高	8,892千円	—
時の経過による調整額	0	—
資産除去債務の履行による減少額	8,892	—
期末残高	—	—

2. 貸借対照表に計上しているもの以外の資産除去債務

当社は、賃貸借契約に基づき使用する事務所等については、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが、当該債務に関連する賃借資産の使用期間が明確でなく現時点で移転等も予定されていないものについては、資産除去債務を合理的に見積ることができないため、当該債務に対応する資産除去債務を計上しておりません。

(賃貸等不動産関係)

前事業年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前事業年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

当社は、単一セグメントであるため、記載を省略しております。

当事業年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

当社は、単一セグメントであるため、記載を省略しております。

(関連当事者情報)

前事業年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
1株当たり純資産額	1,108.81円	1,088.47円
1株当たり当期純損失金額	△55.24円	△22.59円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失金額であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純損失金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
当期純損失金額 (千円)	△143,218	△58,586
普通株主に帰属しない金額 (千円)	—	—
普通株式に係る当期純損失金額 (千円)	△143,218	△58,586
期中平均株式数 (株)	2,592,672	2,593,100

(重要な後発事象)

該当事項はありません。